

# 蓬莱づくり

(能登町)

「さらさら」と流れるように筆を走らせる。次々と書き上げられる「福寿」の文字は丸々としていて、見るからに御利益がありそうだ。主に能登の家庭で神棚に飾られる書や切り絵の縁起物「蓬莱」は、年の瀬を迎えると、真新しい物と取り換えられる。1年で一番「蓬莱」が売れる12月に、能登各地の能筆家は、1枚、また1枚と、家々の幸せを願う紙を仕上げる。

雪が舞う能登町宇出津。看板店を営む二木徹さん(77)と同町崎山3丁目IIが工房で机に向かっていた。周囲には、二木さんが縁起の良い言葉を書いた蓬莱が積み重ねられていた。

日本宗教民俗学会委員の西山郷史さん(69)と珠洲市飯田町IIによると、かつては厳しい山岳修行などを行う修験者たちが、行く先々で切り絵の蓬莱を広め、それが奥能登で息づいていくとみられる。現代になって書の蓬莱が現れ、家々で主人が書いていたのが、いつの間にか能筆家の手に委ねられるようになり、量販店などで売られ始めた。

毎年1万枚

二木さんは毎年、秋から年末に約1万枚の蓬莱を仕上げ、かほく市以北のホームセンターや

## 年の幸せ 字に込め

めでたい「福寿」や「招福」をはじめ、港町向けに「大漁」、農家が求める「豊穰」などの字を、無心に書くのがこの40年来の二木さんの仕事という。

工房の一角に置かれた机の上には大きなすずりと太い筆。妻の静子さん(69)が慣れた手つきで紙を置き、手で押さえる。「まずは福寿にしようか」。徹さんが一定のリズムで筆を動かす

ふるさと  
特派員

### 「福寿」や「招福」丸々と

と、福々しい字が次々と生まれてきた。

となった。

神棚を彩る

金沢出身の徹さんは26歳の時、親戚が住む旧能登町宇出津(現能登町宇出津)に移り住んだ。持ち前の器用さを生かし、親戚の看板店で働くうち、知り合いの家にある神棚に目が止まった。「どこの家にも大きな神

棚があった。紙が飾ってあるのが不思議だった。それが蓬莱だった。自分にも書けるかも」と思い立ち、実際に筆を執ったことが、蓬莱と関わるきっかけ

から下ろされ、新たな蓬莱が神棚を彩る。能登の家庭で連綿と続く年の瀬の光景には、1年間、わが家を見守ってくれた神様への感謝と新たな年への希望が込められている。(森角太地)



な所作で蓬莱を書き上げる  
—能登町宇出津

「ふるさと特派員」は新年から第4社会面に掲載します。